史劇 드라마의 韓服製品 PPL(product placement) 마케팅 現況과 戰略 方案

이　병　화*

I. 서 론

정보통신과 미디어산업이 발달하면서 미디어는 일상생활 속에 완전히 스며들어 있다고 할 수 있다. 우리는 날마다 미디어의 영상매체인 영화, TV, 컴퓨터, 옥외광고, 공연예술, 스마트폰을 통하여 정보를 얻고, 공유하고, 즐기는 커뮤니케이션을 하고 있다. 매체를 통한 미디어 커뮤니케이션은 기업측면에서 볼 때 소비자와 소통할 수 있는 창구이며 자사제품을 광고, 홍보할 수 있는 매체이므로 마케팅 커뮤니케이션의 한 장르로 활용하고 있다. 즉, 기업의 상품을 영화나 드라마와 같은 영상 매체에 등장시키는 간접광고의 일환으로 제품을 배치시키는 PPL(product placement) 기법을 마케팅에 활용하는 것이다. 패션업체들은 비용이 적게 들고 광고효과가 높은 마케팅 전략으로 PPL에 관심을 갖고 “의상협찬”이라는 홍보수단을 발전시켜서 TV드라마나 영화와 같은 대중매체 속에 자사의 브랜드나 제품을 노출시키는 전략을 하여 왔다. 이러한 PPL마케팅 전략은 소비자들이 브랜드나 제품을 인지하게 하여 실제로 제품구매로 이어져 매출을 증대시킨다는 연구와 잠재고객을 확보하는데 효과가 있다는 연구결과가 이미 검증되었다. 이러한 연구는 국내에서 정보통신의 성장과 더불어 21세기 초반부터 활발히 연구되었으며 효과를 검증하기 위해 요소 별로 세분화되어 연구하여 왔지만 한복분야에서는 전무한 상황이다. 최근 국내 메이저 방송매체마다 사극 드라마와 퓨전사극이 성행하는 현 시점에서도 한복업체의 PPL마케팅에 대한 연구는 이루어지지 않고 있다. 그러므로 사극드라마의 열풍에 따라 한복업계도 각자 특색 있는 브랜드 개발과 함께 PPL마케팅에 중점을 두어 한복마케팅의 확장을 이루어야 할 것이다.

본 연구의 목적은 사극드라마의 PPL마케팅 현황을 파악하고 한복제품의 미디어마케팅에 관한 전략방향을 제시하여 한복마케팅의 확대방안을 제시하고자 한다. 따라서 본 연구에서는 PPL마케팅이 무엇이며 의류산업분야인 패션업체와 한복업체에서 적용하고 있는 PPL마케팅의 사례와 효과를 살펴봄으로써 한복제품의 PPL마케팅 방향을

* 한복산업센터 센터장

韓國 傳統 婚禮 節次의 時代的 變化

朴　　允　　美*

I. 序論

혼례(婚禮)란 남녀가 혼인관계를 맺을 때에 수반되는 모든 의식절차를 의미한다. 개인이 부부가 되었음이 사회적으로 인정되는 의례로 '대례(大禮)', '인륜지대사(人倫之大事)', '백년지원(百年之源)', '백복지원(百福之源)'이라고 하며, 일생을 통하여 거치는 중요한 통과의례(通過儀禮) 행사 가운데 하나이다.

우리나라의 혼례절차가 비교적 자세히 남아있는 기록은 조선시대(1392~1910)에서부터 찾아볼 수 있다. 조선시대는 국가의 지도 이념으로 성리학을 삼았다. 성리학은 고려 말기에 전래된 주자학(朱子學)으로 우주의 근본 원리와 인간의 심성을 다루는 철학적인 유학이다. 사회의 근본 사상인 유교사상으로 인해 삼강오륜(三綱五倫)을 권장하고 예(禮)를 중시 여기는 등 관혼상제(冠婚喪祭)에 대해서도 복잡하고 많은 절차를 거치게 되었다. 조선시대 의례에 관한 저서로는 『가례집람(家禮輯覽)』, 『사례편람(四禮便覽)』 등이 있으며 모든 의례는 절차에 따라 엄격하게 수행되었다. 그러나 조선말기 이후 서구문명이 유입되는 개화기를 거치면서 혼례에도 큰 변화가 일어나게 되며, 20 세기 중반에 들어 이러한 의례(儀禮)의 허례허식을 없애기 위해 몇 차례에 걸쳐 가정의례법이 제정, 시행되었다. 이러한 급격한 사회변화와 함께 혼례에 대한 가치와 예식의 절차, 복식의 변화 등도 새로운 혼례문화를 형성하게 되었다.

본 연구에서는 조선시대부터 현대까지의 혼례문화의 전반적인 시대적 상황을 살펴보며, 혼례의식 절차와 혼례복식 등의 변화를 조선시대, 근대, 그리고 현대로 구분하여 살펴보도록 한다. 조선시대의 혼례는 크게 왕실과 민간으로 구분되는데 본 연구에서는 민간에서 행해졌던 혼례에 국한하여 살펴보도록 한다.

II. 時代別 婚禮의 樣式

1. 朝鮮時代의 婚禮

1) 의혼(議婚)

조선시대는 엄격한 유교의 사회로 혼인에서의 의례와 절차를 중요하게 여겼다. 유교사상이 철저히 준수되던 조선시대에는 남녀유별(男女有別)이라 하여 특히

* 檀國大學校傳統衣裳學科研究教授・東아시아歴史文化研究所教授

伪满时期的重要蒙文杂志 《大青旗》（*Yeke köke tuγ*）

娜仁格日勒*

内容摘要：“满洲国”统治下的东蒙地区民族进步人士为使广大民众清醒地认识蒙古民族极为忧虑的严重现状，消除各种社会弊病，改变落后状况，发展民族的教育、文化、产业、医疗等做出了很大的努力，他们创办的蒙文杂志 *Yeke köke tuγ*（《大青旗》）便是其一部分。本文通过对《大青旗》创刊号的分析，阐述殖民统治和战争时期等严酷的社会状况，使得当时的蒙古民族有识之士遇到了种种限制，但是，他们力图通过普及教育、启蒙民众从而振兴民族，为此进行了艰苦卓绝的努力。

关键词： *Yeke köke tuγ*，近代内蒙古，日本殖民统治，民族觉醒

1. 序言

伪满统治下的东蒙地区民族进步人士为使广大民众清醒地认识蒙古民族极为忧虑的严重现状，消除各种社会弊病，改变落后状况，发展民族的教育、文化、产业、医疗等做出了很大的努力，他们创办的杂志《大青旗》便是其一部分。以下从几个方面介绍该刊物。

2. 关于《大青旗》和《青旗》

《大青旗》是双月刊，与《青旗》（*Köke tuγ*）报是姊妹刊，均由青旗社发行。青旗社建于 1941 年初，是在原蒙古会馆（发行《蒙古新报》*Mongγul šine sedkül*）的基础上组建的，由“满洲国”国务院弘报处、兴安局、蒙民厚生会、蒙民裕生会共同出资创办，社长菊竹实藏（菊竹稻穗）。社址在新京(长春)东三马路 23 号，通信处是新京永长路 124 新京中央邮局私书函 101 号。报社初期有蒙古会馆的旧职员 30 名，通信员 70 余名。《青旗》自 1941 年（康德 8 年）1 月 6 日在新京（长春）创刊，1945 年 7 月 23 日停刊。《青旗》报每期大约发行 8 千部，是伪满时期发行时间最长的蒙文报之一。

《大青旗》于 1943 年 1 月 15 日创刊，系双月刊，单月 15 日发行，主编仍然由《青旗》报。主编竹内正担任，插画由乃日木度[1]担任，其创刊号发行 2 千册（创刊号第 12 页等）。

* 内蒙古大学外国語学院教授・東亜歴史文化研究所教授

從 1891 年“金丹道暴動”分析邊疆地區民族沖突的複雜構造

孛兒只斤•布仁賽音* 著

娜仁格日勒** 譯

序　　論

鴉片戰爭後出現的太平天國運動和義和團運動經常被認爲是統治中國260多年的清王朝開始衰敗和最終垮臺的象征。中國學者一直以來樂于用“人民反抗清朝統治”，“人民反抗列強”等“反帝、反封建”的現代化框架诠釋這些反清暴亂。這些研究其實很空洞，他們將所有的漢人作爲反抗清朝的“人民”。然而，清朝作爲一個征服王朝，其垮臺不可能用如此簡單的方式就可以做出完全的解釋。

清朝從1661年到1795年，經歷了康熙、雍正、乾隆的大約130年的鼎盛時期之後，開始面臨幾起如嘉慶年間（1796—1820）的白蓮教起義等大規模的社會動蕩。多數研究者主張這些社會動亂的出現是由明末清初的社會巨變所引發的，包括連年的自然災害導致的大量移民、耕地的短缺以及人口劇增等。明朝末期，馬鈴薯和小麥等新大陸農作物的引進使得北方的幹旱地區也可以耕種。醫學技術的進步，如天花等傳染病的治療，肥料以及灌溉技術的廣泛應用，帶來了人口的激增（Eastman 1988：6-7）。清政府直接統治地區的人口從1741年的1.4億增至1794年的3.1億。也就是說，人口在短短50年的時間裏實現了倍增，每年新增的人口數量高達320萬。1840年，人口數量超過4.1億（Durand 1977；郭松義1990：13）。湖南、湖北等人口密度過大省份的人口不但向南湧進雲南、貴州、廣西、福建、臺灣以及東南亞，而且湧入了四川、山西、湖北等省份的交界處，而山東省的人口開始向中國北部以及長城以北、官方明令禁墾的滿洲旗地和蒙古地區移民。

湧進邊疆地區的大量漢人移民無疑破壞了當地社會關係的平衡。即，當移民數量超過當地人口時他們與後者就政治領導權問題產生了沖突。上述白蓮教起義就是清朝初期的150年間，人口劇增從而使人口平衡遭到破壞所導致的不可避免的結果（山田賢1995）。這種沖突的本質在於，在漢人移民遷來定居的地區居住著非漢族人民，他們擁有與漢人不同的文化。漢人的流入，使這些地區遭遇了移民和當地居民之間在社會行政結構以及文化方面的雙重沖突。雲南（安藤潤一郎 2002）和甘肅（黑岩高 2002）發生的回民騷亂以及光緒17年發生的金丹道暴動，都體現了這些遷移的漢人與當地非漢人之間的對立結構。我們應該注意到，這些由漢人移民發動的暴亂是漢人的民族主義的表現，這種民族主義旨在推翻由滿洲人即非漢人統治的清王朝。來自東北滿洲地區的滿洲人建立了清王朝，並征服中國後定都北京。然而，清朝末期，滿洲人已經失

* 滋賀県立大学教授
** 内蒙古大学外国語学院教授・東亜歴史文化研究所教授

日本戰後對東南亞民族學調查的綜述研究

Japan's postwar for Southeast Asian ethnology research overview

何　　大　　勇*

【摘要】

日本二戰後多學科展開對東南亞的民族學調查，時間上是指上世紀 50-60 年代。從這個時期開始，日本對外的調查，不再冠以探險（expedition）為題進行調查，大都冠以科學性的研究調查為題。可以說，二戰後的調查雖然有一些是戰前的延續調查，但是更加注重實地調查，帶有了日本獨自性的內容，故有了東南亞的學術話語權，雖然從 1945 年到 1956 年的 11 年間未開展過任何的實地調查，當然這期間的基礎研究並未停下來，這個基礎工作主要是指文獻研究，特別是對法、德、英學者以及中文的翻譯研究。從 1957 年才開始進行實地調查，實地調查開展的主要地域是東南亞、南亞地區，本稿主要論及東南亞地區的調查，南亞地區的相關調查研究別稿論述。

【關鍵字】日本；東南亞；民族學調查；學術史；二戰後

【Abstract】

Japan after the second world war to start the ethnology research of southeast Asia, refers to the time of the last century 50-60's. Starting from this period, Japan's foreign investigation, no longer as exploration (expedition) under investigation, mostly with scientific research topic. Can say, after world war ii, although there are some investigation is the investigation before the war continued, but there are other is alone with the Japanese sex, with the academic discourse of southeast Asia, although from 1945 to 1956, 11 years do not carry out any field research, basic research, of course, this period did not stop, the foundation work is mainly refers to literature research, especially in French, German and British scholars, and Chinese translation studies. Since 1957 began to field investigation, field investigation is the main area of southeast Asia, South Asia, number mainly deals with the investigation of southeast Asia, South Asia, the related research doesn't draft in this paper. For today to know these areas, there are very good reference and reference.

【Key words】Japan; Southeast Asia; Ethnology research; Academic history; After the second world war

---

* 雲南民族大學雲南省民族研究所研究員・東亞歷史文化研究所教授

本研究是“雲南省民族文化研究院2017年度招標課題”的成果之一。招標課題編號《日本戰後對東南亞民族學調查的研究》(MZ2017YB01)。

中国における苧環神話

―日本の三輪山神話の原風景―

百　田　弥　栄　子*

（一）三輪山神話

私は近年中国の“三輪山神話”について考察を進めている。三輪山は日本の近畿地方、奈良県桜井市の西部にある古来信仰の山で、標高 467 メートル。杉と檜の大木に覆われた円錐形の美しい山容で、全山が大神（おおみわ）神社（大三輪神社）の御神体である。そのため本殿がなく、拝殿を通して三輪山を拝礼するという、最も古い祭祀形式を今に伝えている。この三輪山の麓を中心とした地域に、古代の王権・大和朝廷が興ったという土地柄でもある。

八世紀初頭に成った日本最古の歴史書『古事記』は、神山三輪山にまつわる神話を記録している。その物語は、

> 崇神天皇の御代に疫病が蔓延し、民が死に絶えようとするほどで、天皇は大変憂えた。すると夢に大物主（オホモノヌシ）大神が現れて、「大田田根子（オホタタネコ）という者に私を祀らせよ」というお告げ。天皇は四方に早馬をやって大田田根子を探し求め、三輪山で大物主大神を祀らせると、さしもの疫病も収束し国も安らかに治まった。

という骨子に、大田田根子という人が大物主大神の子孫であるという話が続く。それは、

> 美しい活玉依毘売（イクタマヨリヒメ）（巫女）の元に夜ごと通い来る男があって、娘は身籠もり、これを知った父母は娘に「糸巻きの紡いだ麻糸を針に貫き通して、それを男の衣の裾に刺し込みなさい」と言い含めた。娘は教えられた通りにして翌朝見ると、麻糸は戸の鉤穴を抜き通って、ただ残れる麻糸は三輪のみだった。そこでその地を三輪といった。麻糸はそのままずっと三輪山に続き、神の社に留まっていた。それで大田田根子が大物主神の子孫であることが知れた。

というのである。この大物主大神は三輪山の主神で、『日本書紀』に「天空を踏みとどろかして三輪山に登って行かれた美しい小蛇（こおろち）」とあるように、蛇体と考えられている。水の支配者、農耕の神である。

ここで私は「夜中、娘のところに立派な若者が通ってくるのを怪しみ、男の衣服に糸を通した針を刺し込み、翌朝その糸をたどって行くと、蛇の住処に至った」という場面に注意した。日本で「苧環（おだまき）型」とか「三輪山型」とかいわれるモティーフである。すなわちみめ麗しい若者が巫女的な性質をもつ美しい娘の元に通い、猛威を振るった疫病を収束させるような人並み優れた男児を得るという物語である。

* 東アジア歴史文化研究所　教授

甲申政変後の日本における朝鮮国人の動向に関する一考察

―　朴泳孝と日本軍事留学経験者たち　―

横　田　素　子*

はじめに

小論は、嘗ての大朝鮮国において1884年12月４日に起こった独立党（開化派）によるクーデターである「甲申政変」以後の日本における朴泳孝と日本での軍事留学を経験した朝鮮国学生たちの動向について、外務省外交史料館所蔵資料を用い考察を試みるものである。

その資料とは、外務省外交史料館に所蔵される「戦前期外務省記録」のうち、１門１類２項亜細亜の「韓国亡命者金玉均ノ動静関係雑件（京城説伝）第三巻」に所収される「韓人ニ関スル警視庁及兵庫県庁ヨリの報告」であり、当該期間は明治18年（1885）12月19日から明治19年（1996）９月18日までの10か月間である。

小論の題名とした「甲申政変」は、韓国近代史上の名称である。現在、日本で刊行される辞典類の頻出見出し語は「甲申の変」であるが、当時、日本では「朝鮮京城事変」[1]、或いは「朝鮮暴動事件」[2]「京城事変」[3]、「京城暴動」[4]の記載が確認できるものの、当該事件に対する確たる名称は存在しなかったと解する。また記録上、「京城事変」は明治15年（1882）の政変、所謂「壬午軍乱」と明治17年の「甲申政変」の何れをも指すものであったが、壬午軍乱については、発生当時から、日本で起こした記録には「朝鮮事変」と称されていた。時代的後者である甲申政変はその勃発から45年を経過した後、昭和５年（1930）３月に作成された「明治十七年朝鮮事変」と題した簿冊[5]が戦前期外務省記録に確認でき、対して壬午軍乱については「明治十五年朝鮮事変」[6]として記録されるに至ったという経緯を有する。

さて、筆者に該論題での拙稿執筆を惹起せしめたのは、以下の２件の資料の存在である。

〔資料Ａ〕[7]

探偵書抜萃

過日清國上海ヨリ渡航シ来リタル朝鮮人閔周鎬尹定植ノ二名ハ曩ニ朝鮮變乱ノ際閔泳翌ニ随従清國ニ渡リシカ本月上旬来朝一日金玉均ニ面接シテ云フ僕等ハ閔泳翊ノ如キ守舊家ニ長ク随従スルヲ欲セズ将来君ニ就テ一身ヲ共ニセントノ覺悟ヨリ断然去テ此地ニ来レリ云々ト金玉均之ヲ聞キ以為ク反對主義ノ閔泳翊ニ随ヒ居リシガ俄然素志ヲ飜シ予ヲ慕ヒ来リシ心中聊カ不審ナルノミナラズ壱萬圓ノ金額ハ朝鮮國ノ官金カ将タ閔氏ノ私金ナルカ益々疑ヒナキ能ハズ今仮リニ両人ノ言ヲ信シ此レヲ容レナバ清國及ヒ朝鮮政府ニ於テハ右両人ノ擧動モ必ラス予ノ教唆ニ出シモノト見做スベシ又一

* 東アジア歴史文化研究所教授・内蒙古大学客員教授

海中や崖端に建つ鳥居は精霊を迎える

下　村　克　彦*

Ⅰ　自然信仰から神道へ

日本における信仰を目的とした遺物は、旧石器時代の人形（ひとがた）と解するコケシ形石製品に始まる。縄文時代（新石器時代）には、土偶や石棒を代表に列島全域で共通性があり、信仰を目的とした多様な道具を生み出した。縄文時代の信仰は、「呪術」あるいは「アニミズム」の語を用い、集落単位の自然信仰と解している。「縄文時代の神」と表現することもあるが、教義を有し体系化した神では無く、「自然神」であり、「神」以前の「精霊」とするのが適切である。自然信仰の精霊は豊穣を齎すが、災厄をも齎すのであって、精霊は必要な時必要な期間のみ居てもらうのがよく、終われば早々に去ってもらうのが理想である。故に原始においては必要に応じて、精霊を招き、祀り、終えれば去ってもらったと私考する。

農耕に稲作が加わった弥生時代以降は、中国や韓国を経て伝わった神仙思想・陰陽道・五行説・道教・儒教・仏教を取り入れ信仰内容が豊かにかつ体系化していった。やがて精霊は「神」として体系化し、社殿に祀るようになった。「常設の社殿」ということは「神が常在」するようになったのである。

神道では通常「神」を社殿に祀り、社殿の位置する区域を神域と認識し、神域を「神社」と称している。大陸からの諸信仰を在来の信仰が取り入れながら教義を形成していきつつ、巨岩や巨木・山・海・乾湿風雨などの自然現象をも神のなせる業として、自然信仰を排除せず包括して独自の信仰教義を形成した。日本固有の宗教である「神道」が成立したのである。少しく乱暴に総括すれば、唯一神宗教は他の宗教・信仰を全否定し、仏教は他の宗教・信仰の神々を部分否定するが、仏教に組み込み仏法を守護する位置づけとし、神道は全否定も全肯定もせず必要な部分のみを導入してきた。と、私考している。

Ⅱ　鳥居

神社の入り口には鳥居が建っている。鳥居から先が神域であり、神域を通常は境内という。境内の外に参道が連なる場合は、起点に一の鳥居を建て、参道が長ければ中間に二の鳥居を建てる。境内入り口の鳥居が三の鳥居となる。稀に中間に２基の鳥居を建てたり、社殿を起点に社殿に近い鳥居から一～三の鳥居と逆呼称する社もある。

*　東アジア歴史文化研究所　主席研究員